

ジョン・メイナード・ケインズ『孫たち
の世代の経済的可能性』
(1930)* I

我々は今、深刻な経済的悲観論の波に苦しめられている。19世紀を特徴づけた巨大な経済的進歩の時代は終わった、生活水準の急速な向上は——少なくとも英国においては——今後鈍化するだろう、そしてこれから先10年間は、繁栄の向上よりも衰退の方が可能性が高い、といった言葉を耳にすることがよくある。

私は、これが現在我々に起きていることに対する、甚だしく誤った解釈であるとする。我々が苦しんでいるのは、老齢に伴うリウマチではなく、過度に急速な変化による成長痛であり、ある経済時代から別の経済時代への移行に伴う再調整の痛みなのである。技術的効率の向上は、労働力の吸収という問題に対処できる速度を上回るペースで進んできた。生活水準の向上は少々速すぎた。そして、世界の銀行・通貨制度は、均衡が要求するほど迅速に金利が低下することを妨げてきた。それでもなお、その結果生じる浪費と混乱は、国民所得の7.5パーセントに過ぎない。我々は1ポンドのうち1シリング6ペンスを無駄に浪費しており、手元には18シリング6ペンスしか残っていない。もし我々がもっと分別を持っていれば、1ポンドを手に入れたはずなのに。とはいえ、その18シリング6ペンスは、5、6年前の1ポンドに相当する額にまで積み上がっているのだ。我々は、1929年に英国の産業の実質生産高がかつてないほど大きかったこと、また、すべての輸入代金を支払った後に新たな海外投資に充てられる対外収支の純黒字が、昨年は他のどの国よりも大きく、実際、米国の同黒字よりも50パーセントも大きかったという事実を忘れてしまっている。あるいは、比較の対象とするならば、仮に我々が賃金を半減させ、国債の5分の4を不履行とし、余剰富を年率6パーセント以上で貸し出す代わりに、不毛な金として蓄え続けたとしよう。そうすれば、我々は今や多くの人々から羨ましがられているフランスに似ることになるだろう。しかし、それは改善と言えるだろうか？

現在世界を覆う不況、需要に満ちた世界における失業という巨大な矛盾、そして我々が犯してきた破滅的な過ちは、表面下で進行している事象や物事の動向に対する真の解釈を見えなくさせている。なぜなら、私は、現在世界でこれほど大きな騒ぎを巻き起こしている二つの対立する悲観論——事態があまりにも深刻で、暴力的な変革以外に救いはないと考える革命家たちの悲観論と、経済・社会生活の均衡があまりにも危ういため、いかなる実験も冒してはならないと考える反動派たちの悲観論——の両方が、私たちの時代において誤りであることが証明されると予測するからだ。

しかし、このエッセイにおける私の目的は、現在や近い将来を検証することではなく、近視眼的な見方を振り払い、未来へと羽ばたくことにある。100年後の私たちの経済生活の水準は、合理的に見てどの程度になると予想できるだろうか？ 私たちの孫たちには、どのような経済的な可能性があるのだろうか？

記録が残っている最古の時代——例えば、2000

架の考察18世紀初頭に至るまで、地球上の文明の中心地に住む平均的な人々の生活水準には、それほど大きな変化はなかった。確かに浮き沈みはあった。疫病、飢饉、戦争の襲来。黄金時代。しかし、漸進的かつ劇的な変化はなかった。ある時期は他の時期よりおそらく数パーセント、せいぜい100パーセントほど良かったかもしれないが、それは（例えば）西暦1700年に終わった4000年の間に限った話である。

この緩やかな進歩のペース、あるいは進歩の欠如は、二つの理由によるものであった——重要な技術的進歩が著しく欠如していたこと、そして資本が蓄積されなかったことである。

先史時代から比較的近代に至るまでの間に、重要な技術的発明が見られないことは、実に注目しに値する。近代が始まった時点で世界が有していた、真に重要なもののほとんどすべては、歴史の黎明期にはすでに人類に知られていたのである。言語、火、今日私たちが飼っているのと同じ家畜、小麦、大麦、ブドウ、オリーブ、鋤、車輪、櫂、帆、皮革、亜麻、布、レンガ、土器、金、銀、銅、錫、鉛——そして紀元前1000年より前に鉄がリストに加わった——銀行業、政治術、数学、天文学、そして宗教。私たちがいつこれらのものを初めて手に入れたかについての記録は残っていない。

歴史の幕が開く前のある時代——おそらくは最後の氷河期以前の穏やかな期間のいずれかにおいて——今日私たちが生きている時代と匹敵するような、進歩と発明の時代があったに違いない。しかし、記録に残る歴史の大部分においては、そのようなものは何も見られなかった。

近代は、16世紀に始まった資本の蓄積とともに幕を開けたと私は考える。私は——その理由については本論の枠内で詳述する余裕はないが——これが当初、スペインが新世界から旧世界へ持ち込んだ金銀の財宝に起因する物価の上昇、そしてそれがもたらした利益によるものだったと信じている。その時から今日に至るまで、何世代にもわたって眠っていたかのように見えた複利による蓄積の力は、再び息を吹き返し、その力を取り戻した。そして、200年以上にわたる複利の力は、想像を絶するほどのものである。

これを例示するために、私が算出した金額を挙げてみたい。今日の英国の対外投資の価値は、およそ

4,000,000,000ポンドと推定されている。これからは約6.5パーセントの利回りが得られる。その半分は本国に持ち帰って享受し、残りの半分、すなわち3.25パーセントは、複利で海外に積み立てている。このようなことが、約250年にわたり続いてきたのである。

というのも、私は英国の対外投資の始まりを、1580年にドレイクがスペインから奪った財宝にまで遡るからである。その年、彼は「ゴールデン・ハインド号」から得た莫大な戦利品を携えてイングランドに帰還した。エリザベス女王は、この遠征に資金を提供したシンジケートの大株主であった。彼女は自身の取り分から、イングランドの対外債務を全額返済し、予算の均衡を図り、手元には約4万ポンドが残った。彼女はこれをレヴァント会社に投資し——同社は繁栄した。レヴァント会社の利益を元手に、東インド会社が設立され、この偉大な企業の利益こそが、その後の英国の対外投資の礎となった。さて、3.5%の複利で積み立てられた4万ポンドは、様々な時点における英国の対外投資の実額とほぼ一致しており、今日では実際に4,000,000,000ポンドに達する。これは、私がすでに、現在の英国の対外

投資総額としてすでに挙げた額に相当する。つまり、1580年にドレイクが持ち帰った1ポンドごとに、現在では10万ポンドになっているのである。これこそが複利の力である！

16世紀から、18世紀以降にその勢いを増して、科学と技術発明の偉大な時代が始まり、19世紀初頭からはその流れが全盛期を迎えている——石炭、蒸気、電気、ガソリン、鉄鋼、ゴム、綿、化学工業、自動機械と大量生産の方法、無線、印刷、ニュートン、ダーウィン、アインシュタイン、そして挙げればきりが無いほど有名で身近な、数え切れないほどの事柄や人物たちである。

その結果はどうなったか。住宅や機械を供給しなければならないほど世界人口が膨大に増加したにもかかわらず、欧米における平均的な生活水準は、私の見るところ、およそ4倍に引き上げられた。資本の成長は、過去のかなりの時代が経験したものの100倍をはるかに超える規模で進んだ。そして今後、これほど大きな人口増加は期待できないだろう。

仮に資本が年率2パーセント増加するとすれば、世界の資本設備は20年で半増し、100年で7.5倍になる。これを住宅や交通機関といった物質的なものとして考えてみてほしい。

同時に、製造および輸送分野における技術的進歩は、過去10年間で歴史上かつてない速さで進んでいる。米国では、1925年の1人当たりの工場生産高が1919年より40%増加した。欧州では一時的な障害によって足止めされているが、それでも技術的効率率は年率1%以上の複利で向上していると断言しても差し支えない。これまで主に産業に影響を与えてきた画期的な技術的变化が、まもなく農業にも波及する可能性があるという証拠がある。鉱業、製造業、輸送分野で既に起こったのと同等の、食料生産の効率向上という飛躍的な進歩が、目前に迫っているのかもしれない。数年後——つまり私たちの生きているうちに——農業、鉱業、製造業のあらゆる作業を、これまで慣れ親しんできた人的労力の4分の1でこなせるようになるかもしれない。

現時点では、こうした変化の急速さそのものが私たちに打撃を与え、解決すべき困難な問題をもたらしている。進歩の最前線に立っていない国々は、相対的に苦境に立たされている。私たちは、一部の読者にはまだその名称を耳にしたことがないかもしれないが、今後数年のうちに頻繁に耳にするようになるであろう新たな病に悩まされている——すなわち、「*技術的失業*」である。これは、労働力の使用を節約する手段の発見が、労働力の新たな活用先を見つけるペースを上回ったことに起因する失業を意味する。

しかし、これは単なる一時的な不適応の段階に過ぎない。長期的に見れば、これらすべては人類が経済問題を解決しつつあることを意味している。私は、100年後の先進国の生活水準は、今日の4倍から8倍になるだろうと予測する。現在の知識に照らしても、これには何ら驚くべきことはない。さらに遥かに大きな進歩の可能性を想定することは、決して愚かなことではない。

II

議論のために、100年後には私たち全員が、経済的な意味で、平均して今日よりも8倍豊かになっていると仮定しよう

ズ**確**考察、これには驚くべきことは何もないだろう。

確かに、人間の欲求は飽くことのないもののように見えるかもしれない。しかし、それらは二つの種類に分類される——一つは、周囲の人々の状況がどうであれ私たちが感じるという意味で「絶対的」な欲求であり、もう一つは、その欲求が満たされることによって周囲の人々より上に行ったり、彼らより優越感を感じたりできる場合にのみ感じるという意味で「相対的」な欲求である。第二の類の欲求、すなわち優越感への渴望を満たすものは、確かに飽くことのないものかもしれない。なぜなら、一般的な生活水準が高くなればなるほど、それらの欲求はさらに高まるからである。しかし、絶対的な欲求についてはそうとは限らない。おそらく私たちが皆気づいているよりもはるかに早く、これらの欲求が満たされ、それ以上のエネルギーを非経済的な目的に注ぐことを好むようになる時点が訪れるだろう。

さて、私の結論について述べよう。これについては、考えれば考えるほど、想像力をかき立てる驚くべきものだとお気づきになるだろう。

私の結論はこうだ。重大な戦争も、人口の大幅な増加もないと仮定すれば、*経済問題*は100年以内に解決されるか、少なくとも解決の兆しが見えるようになるだろう。これは、将来を見据えた場合、経済問題が人類にとって**恒久的な問題**ではないことを意味する。

「なぜ、それがそれほど驚くべきことなのか」と問われるかもしれませんが。それが驚くべきのは——未来ではなく過去を振り返ってみると——経済問題、すなわち生存のための闘争が、これまで常に人類にとって、そして人類だけでなく、生命が最も原始的な形態で誕生して以来の生物界全体にとって、最重要かつ最も差し迫った問題であったことがわかるからです。

つまり、私たちは——あらゆる衝動や最も深層にある本能とともに——経済問題を解決するという目的のために、自然によって明確に進化させられてきたのである。もし経済問題が解決されれば、人類はその伝統的な目的を奪われることになる。

これは益となるだろうか？もし人生の真の価値を少しでも信じるならば、少なくともその見通しは益となる可能性を開く。しかし、数え切れないほどの世代にわたって培われてきた一般人の習慣や本能が、わずか数十年という短期間のうちに捨て去るよう求められるかもしれないという事態を思うと、私は戦慄を覚える。

現代の言葉で言えば——私たちは、広範な「神経衰弱」の発生を予期せざるを得ないのではないか？私が何を指しているのかについては、すでに少しばかりの経験がある——イギリスやアメリカで、すでにかなり一般的になっているような神経衰弱のことだ。裕福な階級の妻たちの間でよく見られるもので、彼女たちの多くは、その富によって伝統的な役割や仕事から切り離されてしまった不幸な女性たちである。経済的必要性という原動力を失った彼女たちは、料理や掃除、繕い物することに十分な楽しみを見出せない一方で、それ以上に楽しいことを全く見つけられないのだ。

日々の糧を得るために汗を流す人々にとって、余暇は切望される「甘美なもの」だ——それを手に入れるまでは。

ある年老いた掃除婦が、自らのために書いた伝統的な墓碑銘がある——

友よ、私のことを嘆かないで、決して泣かないで。私はこれから、
永遠に何もしないのだから。

「可能性」に関するケイン

ズの考察

これこそが彼女の天国だった。余暇を心待ちにする他の人々と同様、彼女はただ耳を澄まして過ごす時間がどれほど素晴らしいか想像していた——彼女の詩には、もう一節の対句があったからだ——

賛美歌と甘い音楽が天を響き渡るだろう、だが、私はその歌には一切関わらない。

しかし、歌に関わりを持つ者たちにとってのみ、人生は耐えられるものとなるだろう。そして、私たちの中で歌える者は、なんと少ないことか！

こうして、人類は創造以来初めて、真の、そして恒久的な問題に直面することになる——差し迫った経済的心配から解放された自由をいかに活用するか、科学と複利がもたらしてくれた余暇をいかに過ごして、賢明に、心地よく、そして充実した人生を送るか、という問題である。

精力的に目的意識を持って金を稼ぐ者たちは、私たち全員を経済的豊かさの懐へと引きずり込むかもしれない。しかし、その豊かさが訪れたとき、それを享受できるのは、人生そのものの芸術を生き生きと保ち、より完全なものへと磨き上げ、生活手段のために自分自身を売り渡さない人々である。

とはいえ、余暇と豊かさの時代を、何の恐れもなく待ち望める国も人々も、おそらく存在しないだろう。なぜなら、私たちはあまりにも長い間、努力することには慣れ親しんでおり、楽しむことには慣れていないからだ。特別な才能を持たない一般の人々にとって、自分自身を何かに打ち込むことは恐ろしい問題である。とりわけ、伝統的な社会の土壌や慣習、あるいは愛すべき慣例に、もはや根ざしていないのであればなおさらである。世界のどの地域であれ、今日の富裕層の振る舞いや業績から判断するに、その見通しは極めて憂鬱なものだ！ 　なぜなら、彼らはいわば我々の先遣隊であり、残りの我々のために「約束の地」を偵察し、そこに陣を敷いている者たちだからである。なぜなら、独立した収入はあるものの、人間関係や義務、絆を持たない彼らのほとんどは——私にはそう思えるのだが——彼らに課せられた問題を解決する上で、惨憺たる失敗を喫しているからだ。

もう少し経験を積み、私たちは新たに発見された自然の恵みを、今日の富裕層が利用しているのとは全く異なる方法で活用し、彼らとは全く異なる人生設計を自ら描き出すことになるだろうと、私は確信している。

これから何世代にもわたり、私たちの中に「古いアダム」は依然として強く存在し続けるため、誰もが満足を得るためには何らかの仕事をしなければならないだろう。私たちは、些細な義務や仕事、日常のルーチンがあるだけで満足している今日の富裕層よりも、はるかに多くのことを自分たちの手で行うことになるだろう。しかしそれ以上に、私たちは「パンをバターに薄く塗る」ように——つまり、まだ残されている仕事を可能な限り広く分かち合うよう努めるだろう。3時間のシフト制や週15時間の労働であれば、この問題をかなり長い間先送りできるかもしれない。というのも、1日3時間あれば、私たちのほとんどの中に潜む「古いアダム」を満足させるには十分すぎるほどだからだ！

他の分野でも、私たちが予期すべき変化が起こるだろう。富の蓄積がもはや社会的にそれほど重要でなくなれば、道徳規範にも大きな変化が生じるだろう。私たちは、過去200年にわたり私たちを苦しめてきた多くの偽りの道徳原則から解放されることになるだろう。それらの原則によって、私たちは人間のもつ最も不快な性質のいくつかを、最高の美德という地位にまで高めてきたのだ。私たちは、金銭への動機をその真の価値で評価する勇気を持てるようになるだろう。人生の楽しみや現実を得るための手段としての金銭への愛とは区別して、単なる所有物としての金銭への愛は、その実態——ある種の

嫌悪考察き病的な傾向であり、精神疾患の専門家に身震いしながら委ねるような、半犯罪的かつ半病理的な性向の一つであることが認識されるだろう。富や経済的な報奨・罰則の分配に影響を及ぼすあらゆる種類の社会的慣習や経済的慣行——それらがそれ自体、どれほど不快で不正であろうとも、資本の蓄積を促進する上で極めて有用であるという理由だけで、我々が今、いかなる犠牲を払ってでも維持しているもの——を、我々はついに自由に捨て去ることができるようになるだろう。

もちろん、強烈で満たされない目的意識を持ち、それに見合う妥当な代替手段を見つけられない限り、盲目的に富を追求める人々は依然として多く存在するだろう。しかし、私たち残りの者は、もはや彼らを称賛し、励ます義務を負うことはなくなる。なぜなら、自然がほぼすべての人に程度の差こそあれ与えているこの「目的意識」の真の性質について、今日では危険を冒すほどに深く探求するようになるからだ。なぜなら、「目的志向」とは、私たちの行動そのものの質や、自身の環境に対する直接的な影響よりも、その行動がもたらす遠い未来の結果に、より関心を向けていることを意味するからだ。「目的志向」な人間は、自分の行動に対する関心を時間軸の先へと押し進めることで、その行動に偽りの、欺瞞的な不滅性を確保しようと常に試みている。彼は自分の猫を愛しているのではなく、その猫が産む子猫を愛しているのだ。実のところ、子猫さえも愛しているわけではなく、ただその子猫が産む子猫を愛しているに過ぎず、そうして猫の世の終わりまで永遠に先へと続いていく。彼にとって、ジャムとは、今日ジャムではなく、明日ジャムとなるものでなければジャムではない。こうして、ジャムを常に未来へと先送りすることで、彼はジャムを煮るという行為に不滅性を確保しようと努めているのだ。

『シルヴィーとブルーノ』に登場する教授のことを思い出してほしい。

「先生、仕立て屋さんが、お支払いの請求書をお持ちです」と、ドアの外から柔和な声が聞こえた。

「ああ、まあ、すぐに片付けてあげられるよ」と教授は子供たちに言った。「ちょっと待っていてくれ。今年はいくらだ、君？」彼が話している間に、仕立て屋が中に入ってきた。

「ええと、何年も前から倍増し続けているんです、お分かりでしょう」と仕立て屋は少し不機嫌そうに答えた。「今、そのお金をもらいたいんです。二千ポンドですよ！」

「ああ、そんなの何でもないさ！」教授は、まるでいつも少なくともそのくらいの金額を持ち歩いているかのようにポケットをさぐりながら、気楽に言った。「でも、あと一年だけ待って、四千ポンドに増やしてみないか？　そうすれば、どれほど裕福になれるか考えてみてよ！　そうさ、もし望めば、王様になれるかもしれないぞ！」

「王様になることに、それほど興味があるかどうかは分からないな」と男は思案げに言った。「でも、とんでもない大金には聞こえるな！　まあ、待ってみようかな——」

「もちろん待つに決まっているさ！」と教授は言った。「君には分別があるようだね。さようなら、君！」

「あの債権者に、その四千ポンドを支払うことになるの？」シルヴィーは、去りゆく債権者の後ろでドアが閉まるのを見ながら尋ねた。

「決して払うことはないよ、娘よ！」教授は力強く答えた。「あいつは死ぬまでその額を倍にし続けるだろう。ほら、もう一年待てば二倍のお金が手に入るんだから、待つ価値はいつだってあるんだ！」

おそらく、不滅の約束を我々の宗教の核心と本質に最も深く根付かせた民族が、複利の原理にも最も貢献し、とりわけこの極めて目的意識の高い人間社会の制度を深く愛していることは、決して偶然ではないのだろう。

したがって、私たちは、宗教と伝統的な美德の最も確固たる原則のいくつか——貪欲は悪徳であり、高利貸しは軽犯罪であり、金銭への愛は忌まわしいものであり、明日を最も気にしない者こそが、美德と健全な知恵の道を最も真に歩んでいる——に立ち返る自由があるのだ。

「可能性」に関するケイン

ズ秘考案は再び、手段よりも目的を重んじ、有用なものではなく善を優先するようになるだろう。私たちは、その時間や一日を徳高く、そして良く過ごす方法を教えてくれる人々、物事そのものから直接的な喜びを見出すことのできる魅力的な人々、すなわち、働かず、紡ぎもしない野のユリたちを尊ぶようになるだろう。

しかし、注意せよ！ これらすべてが実現する時は、まだ来ていない。少なくともあと100年は、私たちは自分自身に対しても、すべての人に対しても、「美しいものは醜く、醜いものは美しい」と装わなければならない。なぜなら、醜いものは有用であり、美しいものはそうではないからだ。貪欲と高利貸し、そして慎重さこそが、もう少しの間、私たちの神であり続けなければならない。それらが唯一、経済的必然というトンネルから私たちを導き出し、日の光の下へと連れ出してくれるからだ。

それゆえ、私は、そう遠くない将来、人類全体にとって、生活の物質的環境においてかつてないほど大きな変化が起こることを期待している。しかし、もちろん、それは大災害としてではなく、徐々に起こるだろう。実際、それはすでに始まっている。事態の展開は、単に、経済的必然性の問題が事実上取り除かれた人々の階級や集団が、ますます大きくなっていくというものである。決定的な違いが実感されるのは、この状況が極めて一般的になり、隣人に対する義務の性質が変化したときである。なぜなら、自分自身にとって経済的な目的意識を持つことが合理的でなくなった後も、他者のためにそうすることは依然として合理的であり続けるからである。

経済的至福という目的地に到達するペースは、四つの要素によって左右される——人口を制御する力、戦争や内乱を回避する決意、本来科学が扱うべき事柄を科学に委ねる意欲、そして生産と消費の差によって決定される蓄積率である。このうち、最初の三つが確保されれば、最後の要素は自然と解決されるだろう。

その一方で、私たちの運命に向けて穏やかな準備を整え、目的意識に基づく活動だけでなく、生活の技芸を奨励し、実践してみることに何ら害はないだろう。

しかし、何よりも重要なのは、経済問題の重要性を過大評価したり、その想定される必要性に屈して、より大きく、より永続的な意義を持つ他の事柄を犠牲にしたりしないことだ。経済問題は、歯科医療のように、専門家の手に委ねるべき事柄である。もし経済学者たちが、歯科医と同等の、謙虚で有能な人々として見なされるようになれば、それは素晴らしいことだろう！

* ジョン・メイナード・ケインズ著『説得のエッセイ』(Essays in Persuasion、ニューヨーク：W.W.ノートン社、1963年、358-373ページ) よりスキャン。